フィルム・コメンタリー 2月4日号　- 古い作品から -

木下恵介「肖像』（1948）松竹大船 / 松竹 作品

先週に続き、木下恵介の作品で「女」と同じく1948年の作品。脚本は黒澤明。木下恵介・黒澤明の組合せはこの一本だけですが、松竹の「作品データベース」に依ると「その後再び木下監督・黒澤脚本で時代劇大作『落城』が企画されたが残念ながら実現に至らなかった」とあります。いつ頃の話だったかというと、国立フィルムセンターでの木下恵介時別追悼特集の資料では、1952年のこととありました。黒澤明は1952年に『生きる』を、1954年に『七人の侍』を発表した頃で一つのピークを迎えたところであり、木下恵介は1952年も『カルメン純情す』を、そして1953年には松竹の社内試写で当時の篠田正浩助監督を始めとした若手たちを震撼させた『日本の悲劇』を発表した頃で、これまた充実期を迎えていたところで二人による共作が企画倒れになったのは実に惜しいことです。（小津安二郎『東京物語』が発表された同じ年に同じ日本の家族・家庭をテーマにした作品が出てきたのですが、その内容、表現には対照的な相違点が見られました。小津と木下という松竹の看板監督の凄みが表現されていますが、また別の機会に）

1969年に二人に小林正樹、市川崑が加わって「四騎の会」が結成されたとき、四人によって書かれた脚本があり、山本周五郎の「町奉行日記」を元にした『どら平太』です。紆余曲折を経て木下・黒澤・小林の三人が亡くなった後に市川崑が役所広司を主演に2000年に完成させたという経緯があります。

さて、これは画家一家の住む借家を買受けた不動産屋が、一家を立ち退かせて売ってしまいたいのですが、この立退交渉が上手くいかず、色々と手を変え目的を果たそうとしまが、画家一家の純粋無垢というべき心情に絆されてしまう物語です。黒澤明らしいと言うべきか、まさに黒澤的ヒューマニズムにあるれた作品であり、その筆の強烈さを感じます。そして、それに応えた木下演出であり、カメラの位置取り（格子越しの人物ショットを始めとした黒白のコントラスト、アングルなどなど）に工夫が感じられます。（撮影は永年木下作品のカメラマンを務める楠田浩之、木下恵介の義弟でもあり日本を代表するカメラマンです）

1948年という時代だったからこそヒューマニズムの大切さを訴えたと思えるのですが、このあたりの黒澤的ヒューマニズムの表現が本作の評価を分けるところでもあるのかとも考えます。この黒澤的ヒューマニズムに拒否反応を示す人たちは決して少なくないのも事実です。ヒューマニズムだけで作品を評価するほど単純な話ではありませんが、時代を映すという映画の特性を考え、改めて時代を見つめ直す貴重な機会を提供してくれたものと考えるのです。

女優陣が素晴らしく、主演の井川邦子（1923~2012）は木下組の常連で1977年に引退された女優、桂木洋子、三浦光子もいずれも名演。黒澤明が松竹で『醜聞』（1950）を撮ったとき、桂木洋子が重要な役で起用されていました他に出演は、菅井一郎、三宅邦子、東山千栄子、小沢栄太郎、佐田啓二、藤原鎌足、安部徹と実に豪華です。

デニス・ホッパー『ラストムービー』（1971）

デニス・ホッパーがアメリカンニューシネマの記念碑的作品である「イージーライダー」を発表したのが1969年のこと。その次に手掛けたのがこの作品で、ユニバーサル・スタジオの当時のトップであるルー・ワッサーマンから訳が分からない、難解だとクレームが出て編集のやり直しを命じられたデニス・ホッパーはそれを拒否したため、極めて短期間の公開に終わってしまったという極めて不幸な作品です。日本でも公開されたのは、27年を経た1998年のことです。

ウエスタン映画の撮影のためにペルーの村に入ったハリウッドのロケ隊が、撮影を進めていくのですが、現地の村人たちがすっかりその虜になってしまい、映画作りの真似事を始めます。スタントのデニス・ホッパーが主演に抜擢され撮影が始まるのですが、当然撮影機材など持つはずはなく、木や竹でカメラを模造し撮影気分に浸ります。彼らにとっては映画作りは単なるゲームに過ぎないのです。文明人の代表たるアメリカ人たちがリアリティを追求するわけでもなく、ただ寄り集まって虚構の世界を作っているのを側から見れば滑稽でしかないという旧来のハリウッド・システムに対しての痛烈な批判とも挑戦とも受け取れるのです。ワッサーマンの言うような難解さはこの作品にはなく、それはデニス・ホッパーの行ったモンタージュ手法のせいであると考えられます。

劇中劇（ハリウッド映画）の監督を演じるのは「映画は戦場だ！」のサミュエル・フラーであり、ピーター・フォンダ、クリス・クリストファーソン（音楽も担当）といった反骨精神にあふれた陣容からもニュー・アメリカン・シネマの流れ、奔流というべきか、を感じます。また、特筆すべきは映像美であり、ラズロ・コヴァックス（『イージーライダー』のカメラも担当）の卓越した美意識と技術は素晴らしい。全編を通じ、また特に村の二人の子どもが戯れているところをシルエットで撮ったシーンは絶品です。故国ハンガリーでの動乱の発生のため、やはり同じくカメラマンのヴィルモス・ジグモンドと共にハリウッドに移り、厳しい条件の中で仕事をこなしながら名カメラマンの地位を確立した二人には敬意を表します。